

第百七十二話 天皇免責と引き換えに東条に責任を！

ヒットラー、ムッソリーニと並んで天皇は自由世界の敵と目されており、戦争責任を問う声は世界各地で澎湃として起こっていた。天皇の免責が必要と考えた知日派米陸軍准将の活躍があって、昭和天皇の不訴追が確定した。その代償として、東条元首相を始めとする軍事指導者に全ての責任を負わせることとなった。日本語版と英語版の二つの独白録がそれを物語る。直筆原本が2017年競売落札され、宮内庁に寄贈された。

1 二つの独白録

文藝春秋1990(H2)年12月号で「昭和天皇独白録」が公表され、大きな話題を呼んだ。当時から日本語版とは別の英語版があるのではとの議論があった。その後、NHKが取材の過程で、マッカーサーの軍事秘書で、パターンボーイズの一人でもあった、GHQの民間情報教育局の前身たる心理作戦部を指揮したフェラーズ准将遺族の保管文書の中から、1996(H8)年5月に英語版の独白録が発見された。

2 独白録の作成の背景等

英語バージョンが発見されたことで、「独白録」は天皇免責の為の弁明書との性格が強かったと考えられる。英語版と日本語版の二つが存在するが、その底本は、内記部長稲田周一の作成した「速記録」であろうと推察されている。

昭和天皇への聞き取りは、敗戦から半年余り過ぎた1946(S21)年3月18日から4月8日まで計5回8時間以上に亘り、皇居御文庫の一室で行われた。参集した側近は5人、宮内大臣、宗秩寮総裁、侍従次長、内記部長及び御用掛である。

時は正に所謂戦争犯罪人の逮捕が相次ぎ、米国でも天皇を裁判に掛けるべしとの世論が強く、ソ連や豪州も天皇の責任を問うべきとの立場であり、天皇側近や政府更には知日派のフェラーズ等は危機感を募らせていた。

3 フェラーズの東京裁判対策

フェラーズは、彼が指導した対日心理作戦の成果報告を纏めるに際し、戦争指導者を尋問した。その過程で、天皇の終戦の御聖断を高く評価するようになり、天皇を免責すべきであるとの理解に達した。最もそれを強調するのが日本側の作戦でもあった。悩ましいのは、終戦に際して指導力を発揮し得たのならば、開戦時にも指導力を発揮すべきであり、その責任はどうなるのかであった。フェラーズは、米内元海軍大臣を通じて、全ての責任を東条元首相と嶋田元海相に全責任をとらせるべしと示唆し、東条もそれを受容した。フェラーズの示唆は、天皇の無罪を日本側で立証、戦争責任を東条ら軍の指導者に負わせるということであり、東京裁判も日本の国内改革もこの基本的な考えのもとに推進された。御用掛の寺崎氏の手になる英語版が1946(S21)年4月にフェラーズに届けられた。

4 英語版独白録の特色

英語版は、日米開戦までの経緯に絞り込まれており、軍国主義者達と天皇がどのような関係であったかについて天皇に語ってもらうとの趣旨で、開戦阻止が出来なかった弁明に焦点がある。

英語バージョンをマッカーサー元帥が読んだか否かについては明らかではないが、読んでいたと考えるのが妥当だろう。フーバー元大統領やマッカーサーの顧問であったジョージ・アチソン等も読んだ可能性があるかと推定される。

5 東京裁判天皇不訴追決定

米国の天皇免責を決定的にしたのは、マ元帥のアイゼンハワー陸軍参謀総長宛の電文(1946/1/25)であり、この電文の内容はフェラーズの覚書を下書きにしている。

* 天皇訴追は、日本は大混乱に陥れたと確信する。フェラーズには感謝だが、・・・

(第百七十二話 了)

